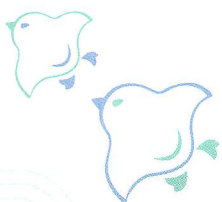


# 京潮の香り

気が付けば、町にいい小屋いい高座、落語が人々の便となるうとする時分。



江戸中期は初代・露の五郎兵衛の活躍も空しく、大阪落語と肩を並べていた京都落語も次第にその鳴りを潜め、めくるめく時代の流れは起源である大阪落語を横目に、歯切れのよい江戸弁やいなせな仕草、人情斬や芝居斬に弱い町衆の心を動かしたのか、無駄のない洗練された話芸を磨いた江戸落語が、純然たる興行物としての環境・風土を先に整えていく。

昭和初期に雑誌「上方」で初めて称された「上方落語」という表現に端を発するの、以後とりわけ関西での落語も、この上方落語を代名詞に絶対的な地位を築き上げていくこととなる。辛くも江戸から明治にかけての四派時代、また近代の新たな二派時代で混迷するも、五代目松鶴が上方落語本来の在り方を追究するべく、伝統の維持に努めたというその功績が大きいのではないかと。

小難しそうな沿革は横に置いていて、今のこの町に目を向けよう。芦乃家雁玉・林田十郎の両師に弟子入りし、漫才師から芸の道を踏んだ芦屋小雁師匠の記憶を辿れば、戦後まもない京の町の落語事情は、新京極の蛸薬師（現マ

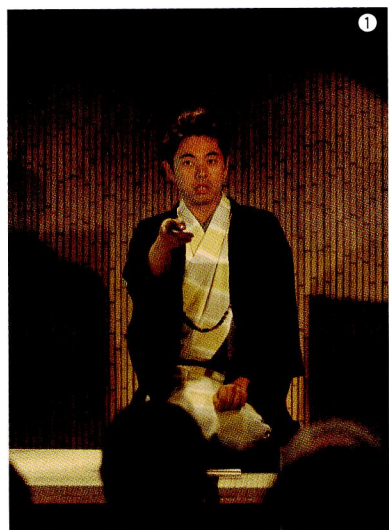
ツモトキヨシ辺り）にあった演芸場「富貴」や西陣京極の「京山亭」の一部にその高座が見られるくらいであったという。十以上も演目がある寄席の中で、一つか二つの斬が聴けるかどうかの程度で、ここは今もその人気を圧倒的に占めるように当時、新興だった漫才が俄然花形だったらしい。

さて最近の落語ブームはどうだろう、ここ2、3年なにやら騒がしい感ではなからうか。しかも確実に全国的現象、特に近頃の若き女性が高い関心を示す様子だ。何年か前の「横丁の若様」と騒がれた小朝の一過的人気とはちとワケが違う。'05年はクドカン作のTVドラマ「タイガー&ドラゴン」、'06年の開席即座に満員御礼を続ける「天満天神繁昌亭」、'07年5月の国分太一主演の映画「しゃべれどもしゃべれども」、次いで10月のNHK朝の連続TV小説「ちりとてちん」と、単にアイドルな斬家にファンが群がるのではなく、明らかに新世代の若き女性性が落語の本質を探ろうと、真面目な姿勢で高座と対峙するものである。それは確実に需要と供給のよきバランスが取れ

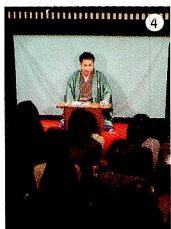
た構造である。気が付けばこの町にも地道な小屋が根付き、かと思えばここ数年の間に高座を設け、落語を通してコミュニティ文化を築こうと名乗りを上げる席亭「オーガナイザー」も少なくない。

手練れば「桂米朝落語研究会」の旗本に、'66年からすでに41年間も緊張感のある高座を出し続ける安井金比羅宮を始め、桂米二を中心とした20年前から篤実なまでに毎月、開席する鯉のかねよの「かねよ寄席」、かれこれ笑福亭猿笑が席主となつて5年、多岐にわたる柔軟な小屋使いに席亭らしい顔を見せる長谷川氏自慢の錦湯「湯快寄席」、始めて4年とはいえ月1回のペースで早くも40回以上、法話十話芸を季節料理と共に啓蒙する、醍醐寺の境内は「雨月茶屋」での「雨月寄席」、年4回とはいえこれ4年になる国立博物館の「京都・らくく博物館」

と、しっかりと地固務めに尽力した、コンバージョン型の小屋の貢献は見逃せない。その甲斐あつてか、昨年あたりから仲間入りを果たす小屋が増え始めた。宇治は小倉駅前焼肉店「海雲亭」のオーナー金さんも落語に魅せられた一人



①宇治は小倉の焼肉店「海雲亭」の新たな展開「野菜屋牛丸」が送る寄席は、立ち上げて間もないが地元でしっかり定着した。高座回りの環境など精緻な小屋作りにも定評がある。次回は3月19日(水)20時開演。☎0774・21・8318 ②20年余の寄席を続ける鯉のかねよの心意気に敬服。うな井またはきんし井付で、木戸銭は1470円。次回は2月25日(月)17時開場、19時開演。☎075・221・0669 ③風呂屋の暖簾や番台周りを柔軟に使う席亭、錦湯の「湯快寄席」。次回は2月18日(月)19時～木戸銭2000円入浴券付き☎075・221・6479。詳しくは綴じ込み別冊「歩想」参照。④町中で新たな小屋としての仲間入りを果たした町家カフェ「らん布袋」寄席は、珍しく講談師、旭堂南青が高座をきります。席亭ランディー・チャネル宗業の茶室空間に巧く寄席の機能を移植させた。次回は2月29日(金)の17時半開場、18時半開演。抹茶＋お菓子付きで木戸銭2000円。☎075・801・0790



モックン・カズロー ●京都生まれの京都育ち、生家は染屋という生粋の京都人。現在の「京都CF」の根幹に携った前編集長。現在は「京都CF」のご意見番を務める傍ら、広告企画制作から同志社大学のプロジェクト講師まで、ジャンルの垣根を越えて京都にまつわる仕事に従事する。趣味のサーフィンより、街場の小波に乗るのが上手いとまっぴら評判である。「京都CF！」スタッフブログ「ご意見番の無責任、町案内」連載中

撮影／遠藤基成 中島光行